

震

動

発行人 金沢真宗学院
代表者 高 桑 敬 和
金沢市安江町 15-52
金沢教務所内
電話 076-265-5191

第 33 号

「死について」……

金沢真宗学院 元指導 吉藤 暢美

本年をもちまして十七年にわたり、お世話になりました、真宗学院指導を退任することとなりました。

退任にあたり『震動』へ一文を寄せよとのことで書かせていただきます。

さて、何について書こうかと思案いたしました。

本来であるなら十七年間の学院での思い出や出来事、他の指導の皆様、卒業生、在院生等との出会い想い等などを書けばいいかとも思いましたが、全く違うことがらを書かせていただきます。

それは昔から私の心のどこかに澱のように濁っている「死」についてです。

私が「死」について何気なく意識したのは幼稚園の頃でした。

「地獄」「極楽」などの言葉から「死」を漠然と意識したように思います。

死んだらどうなる？ほかの世界に生まれ変わるのか？誰もが小さい頃考えたであろうことが「死」についての想いでした。

皆様方にいまさら言うのも何ですが、生を受けた瞬間より「死」への道へと歩み出すのです。

生死は表裏一体、生老病死、四門出遊、佛法の要の一つです。

小林武彦著『生物はなぜ死ぬのか』(二〇二一・講談社)によれば三十五億年前に生命体が誕生し、長い歴史の中に遺伝子にプログラミングされているのが「死」であるとのことです。なぜプログラミングされたかという生命体の使命である、種の保存と繁栄のためだと書かれています。なぜ「死」が種の保存と繁栄に繋がるかと疑問に思われる方もいるかと思います。

その理由について、遺伝子は時間の経過とともに徐々に劣化、そして傷つくため、そのような遺伝子が受け継がれることを防ぐために「死」というものをプログラミングしているからと説明されています。

傷ついた遺伝子は種の絶滅に繋がるのです。

生を受けた時からその着地点？でもある「死」があるにもかかわらずどこか遠くにおいている私がいるのです。

すぐそこに「死」の足音が聞こえるのかもしれないのに、その足音を聞こうとしない私がいいます。

「死」は古来より忌み嫌われ、畏怖畏敬され、また敬われてきました。

中世の京の都においては火葬・土葬は貴族階級に限られたものであり、棺に納められ陵に入る天皇などは別格でした。

ごく普通の人々の亡骸は風葬で野ざらしであり、鳥獣に食われ骨となり土に還る身です。

京の都においては、三大葬送地、葬送地とは死体捨て場のことで、都の郊外の山裾の、鳥辺野、蓮台野、化野に運ばれ打ち捨てられるだけでした。

葬送地の手前には六道の辻(真宗の教義はにおいておきま

して)があり、あの世とこの世の境界を示していました。

風向きにより物凄い腐臭が都に漂っていたと言われます。

そのようなことから「死」はどこか遠ざけたいもので、嫌うもの避けていたものでした。

「死に支度いたせいたせと桜かな」 一茶

「散る桜残る桜も散る桜」 良寛

先人たちの中には「死」をしつかりと受け止めて生き、「死」へと旅立たれた方もいらっしゃいます。良寛上人などは七転八倒の痛みへのうちまわり「死」へと向かったそうです。医療の発展した現在では麻酔等で痛みからある程度逃れることができますが、昔は痛みをただ我慢するしかなく悲鳴も上げたことでしょう。「死」は痛みとともに恐怖を伴うのです。

「死」というものは決して綺麗なものではありません。

「ホスピス」という言葉はご存じでしょう。末期ガン等の患者さんに肉体の治療とともに心の慰め・安心を与えることです。

『往生要集』には病人のそばで仲間たちが集まり花が咲き香った綺麗な極楽を心に想い描かせています。

「あなただけが苦しみ死へと向かうのではなくここに在る皆も同じように苦しみ死へと向かうのですよ」

と死に向かう者の孤独感を理解と連帯感によって和らげているのでしょう。

これは仏教流のホスピスといえるのではないのでしょうか。

また信仰を受け入れ、泰然自若の思いで「死」へと向かわれた方々もいます。

あるプロテスタントの方は、

「僕は洗礼を受けたからじたばたし、虚空を掴み死にたくない死にたくない、痛いのは嫌だ嫌だと言いつつ死ねるようになったよ」

と言われたそうです。神に身を任せ委ね、素直な身となれたのかもしれませんが。

クリスチャン作家の遠藤周作氏は神と阿弥陀さんはよく似ているんじゃないかと言われています。何も答えてくれない、答えも出してくれない、ただ神に、阿弥陀さんに身を任せるだけなのではないかと言われています。しかしながらすべてを委ね、任せられる身にならない我が身があるのです。

「死」そのものの恐怖などは私にはありません。その前提としての痛み苦しみ、そしてすべてを引っさらっていく「死」への畏敬の念があるだけです。

現在の真宗は「生きる」ことに重点を置き「死」に対するこだわり・想いが希薄ではないかと感じる場合があります。

「今を生きる」それも大切ですが、「いずれ死ぬ」も大切なのではないのでしょうか。

真宗ではよく「お迎えが来る」と言いますね。ただ「死」を待つだけでいいのでしょうか。

先に書きました「死に支度いたせいたせと桜

かな」という一茶の句、その中の支度とは何でしょうか。

私には「法に触れなさい、聞きなさい」というのが支度ではないかと感じられます。

しかしながら、法に触れずにいる私、聞かずにいる私がいいます。

闇の中をふらふら歩く私がいるのです。

フランスのベルナノスという思想家であり宗教作家の方が言われた言葉があります。私の好きな言葉であり、私にピッタリと当てはまる言葉です。

「信仰とは九十九%の疑問疑惑と1%の希望があるのみ」と言われています。

私にはこの言葉が心に突き刺さる思いです。どこに答えがあるのか、どこに向いて歩めばいいのか、本当に闇の中をあてもなく歩く身なのです。

漆黒の闇、漆黒、真つ黒でありながら光沢を放つ、光を放つのです。

闇の中を歩むことそれが大切ではないでしょうか。

そこに一筋の光があるのかないのかではなく、歩み自体が大切であり求道なのでしょう。

闇の中で迷い、引き返し、立ち止まり、何度も何度も振り返り、光を求めながら「死」へと歩むのです。

残された時間はそんなに多くはないかもしれませんが、白駒の除(げき)を過ぐるが如しです。

一泊研修会

仏道は自分を抜きにして始まらない

二〇二四年度一泊研修会 講師

ジェシー・釈萌海



講師 ジェシー・釈萌海

二月の金沢真宗学院の一泊研修会で学院生と出遇わせて頂き、何より貴重なひと時となりました。

以前から気になっていた問いの一つに「サンガとは何か」があります。そしてそのことを、私が学んだ学院では、残念ながらあまり感じる事ができず、孤独な期間を過ごしたことを覚えています。それは勿論、私自身の問題もあったと思います。しかし、今回の研修で短期間で、金沢真宗学院生と一人一人と共通の課題を感じ、同じ仏道を歩む仲間として絆を感じる事ができ、心より感謝しています。これこそが「サンガ」だと、共に学び語り合いながら教える

出遇っていく場である、と感じました。皆さんは間違いなく恵まれています。問いを持つ事は、真の宗教に出遇うための入り口であって、私たちを歩ませている促しでもあります。問いが無ければ、歩みも始まらない。自分を抜きにして仏道はあり得ない、と思います。

私の歩みは浅くて知識はありませんが、今までの歩みの中で、出遇ってきた人が善知識として導いてくださいました。Everyone can be a teacher to us if we only have the heart and mind to listen.

さて、その私の歩みを紹介させていただきますと、書物で勉強する事は勿論大切ですが、やはり限界があると感じています。また、日常生活の中の出遇いやぶつかり合いが、最も重要な私の促しとなっていると実感しています。「日本人ではないあなたは非常に難しい真宗を学ぶことに相当ご苦労をされているのでは」と、学院生の一人から問われました。おそらく外国人だけではなく、日本人である真宗門徒も色々と苦労されているように感じています。聞法会では、講師になる人が伝えたいことと、門徒さんがついてこられるレベル、つまり理解できる話に、かなりの差があるように感じています。英語では「we want」と「they want」と表現できますが、住職や坊主としては、そこを意識する事も大切でしょう。「難しい話は要らない」と門徒さんからよく聞こえてきます。しかし、住職として教えるを伝えていかなければならない、伝えていきたい、そのような義務感や気持ちがあるのは当

然です。難しい話をいかにわかりやすく伝えていくのか、と僧侶の私たちが問われているのではないのでしょうか？ 私も答えを持っている訳ではありませんが、課題として感じています。

私自身は学ぶプロセスとして、まず英語の本を読んで、後に日本語で同じテーマを読んでみます。英語は表現が婉曲ではなく、かなりストレートなところがあるので、少し英語ができる人にもきっと分かりやすいと思います。真宗の本で英訳された本がいくつかありますので、日本語や英語のバージョン、両方を読めば面白いと思います。

個人的に特に課題となっている法蔵菩薩の物語ですが、法蔵魂、法蔵精神、それについて書いてある曾我量深の、「Chijo no kyushu: Hozo bosatsu shutsugen no igi」、日本語では『精神界』の論文「地上の救主―法蔵菩薩出現の意義―」が心に響きました。是非とも一読してみてください。

また、「有縁の法」という言葉を紹介したいと思います。「ただ仏法を学ぶという事であれば、



どんな教えだつて学べる。学問の対象として学べる。しかし、仏法を生きることとして学ぶ、行学とするときには、必ず有縁の法によれ」と、親鸞聖人は『教行信証』(二四六頁・私訳)に記されています。

「何故、真宗大谷派を選んだのか」とよく聞かれますが、私自身の選びではなかったのは確かです。聞かれる度に、答えに戸惑っていました。ある日「有縁の法」という言葉に出会い、目から鱗が落ちました。「有縁の法」とは、自分自身にふさわしい法(道)ということです。自分の生きる道として仏教を学ぶということです。ただ知識として得ようとする学び方は、本当の学び方とは言えないのです。苦しみや悩み、悲しみや淋しさなどを抱えながら生きる人間に、その人生を力強く生きていける道を教えるのが仏教だと教わりました。自分の生きる道が明らかに

なっていくところにこそ、仏教の学びの大切な点があります。自分自身が苦しみや悲しみに直面したときに、それを問いかける力となるのは如来のはたらきそのものだと思います。

先ほどの「何故、真宗大谷派を選んだのか」という問いに対して、「自分の選びではありませんでした」と書きましたが、確かに導かれているように今は感じています。「道を本当に求めている」気持ちには、以前と全く変わっていないのですが、自分自身の情け無い姿を曝け出しながら、歩みが始まらない事が明らかにになりました。今になって「この道以外私には無い」との情けない自分の姿を受け容れながら、課題を持ちながら、新たな出発となりました。「私」ということが問題にならない限りは、人間にとって出発は起こり得ないです。

そして、学びの浅い段階にも関わらず、高雲寺からの呼び声が私に届きました。「いつか質素な山寺の住職になれたらいいな」という念願は高雲寺との出遇いによって実現され、改めて不思議な力に導かれている自分であると、深く感動しました。あり得ないご縁をいただいているのは確かです。住職として歩みはじめて半年になりましたが、喜びも心配事も両方共に増えたと実感しています。しかし、もはや自分一人だけの歩みではなく、門徒さんと共なる歩みになりました。「ご院さん」と呼ばれる度に、不思議な仏縁に導かれて恵まれている自分であると感謝の気持ちが高まります。

住職として高雲寺の先頭に立ち、ご院さんと

呼んでくださる門徒さんに育てて貰いながら、少しでも恩返しができるよう、ご院さんとしての役目を果たしたいと思っています。真実の教えとtogether、または、高雲寺門徒さんと地域の人とtogether。最終的に、自分自身に向き合いながら、いのちとtogetherに生きていく。その精神を大切にしていきたいと考えています。



班別座談の様子

キャンパスレポート

三年生 聖川 つぼみ

私が真宗学院に入学を志したのは父の死後、教師資格を取って自坊を手伝わないといけないと思ったからでした。

その時は真宗を学びたいとか言う気持ちからはかけ離れたものだったと思います。

学院の入学式では誰が講師で誰が生徒なのか分からずに戸惑い、授業がスタートすると内容も良く分からずに授業を受け、授業で出てくる言葉が段々積みあがっている感じ、分からないことは何でも聞いてと言われても何が分からないのか分からないような状態でした。

そんな中、今回の地震で被災し私が住んでいる集落では甚大な被害がありました。

震災後はバタバタしたまま二年に進級し、夏には修練もありました。

私は修練がいい気分転換になるのではと思い、修練に入りましたが被災地から直接修練に入ったこともあり、そこは異世界のように感じました。

気持ちが切り替わらず、何を見ても被災した自坊の本堂や村の状態と比較し、納得できない感情が溢れてくる、口を開けば感情的な愚痴がでて来る状態でした。

本当の意味で修練に集中するのに二日～三日間と言う時間を費やしたのです。講師の先生が何度も繰り返し言われていた言葉が心に止まら

ず流れていきました。

しかし、ひとつでもその言葉の意味に納得出来たとき、自分の聴く耳や見る目が変わったような気がします。今思えば、修練での経験が私にとって大きな変化、「気づき」を頂きました。

今回、このキャンパスレポートを書くことになり、真宗学院に入ってからどんな事があったのかを考え始めると自分の中に積み重なる変化を実感できた気がします。

本堂に当たり前にあった阿弥陀様が修復のためになくなった際に漠然と感じた空虚感。

自分の中にそんな気持ちがあったのかと驚き、それがひとつの気づきなのだと実感しました。

真宗学院での三年間とは大切な何かに気付くきっかけがあたりわたる場所なのだという事がよく分かりました。



「遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」今がその時ではないかと素直に感じられます。

私にとって、学院での生活、経験はかけがえない時間であり、学院で出会った先生方や同士はかけがえない存在であると言えます。

真宗学院での生活は残りの一年間となりますが、新たな出会いや新たな気づきが、自分にもたらず変化を楽しみたいと思います。

三年生 架谷 紫音

真宗学院に入学して初めに印象に残ったのが、この学院は「自分について学ぶ場です」と言われたことです。自分についてすでに知っていた私は、自分のことよりも、すぐに実践できる作法やお経について知りたいと思っていました。しかし、学院に通い、本山で得度式を受け、日々のお勤めに出させて頂くようになり、私は自分自身について全く知らずにいたことを痛感しました。特に大きなきっかけとなったのが、身近だった御門徒さんを亡くした時です。その時、初めて私はもっとその人を知り、自分を知ってもらいたかったと後悔しました。人の死を受けてでしか自分の心と向き合うことができなかった私はとても弱く、学院で言われた「自分を知る」ということの意味がその時少しだけ理解できた気がしました。

私はまだまだ僧侶として足りない修行の身ですが、学院ではご本尊に向かい合い、自分自身と向き合うということを教えて頂きました。そ

れからは、自坊でも何か迷うことがあればご本尊に向かい合い、静かに手を合わせるが増え、阿弥陀如来が日々の生活に居てくださることに感謝できるようになりました。また、日々のお勤めの場でも、お参りをするだけでなく、ちゃんと御門徒さん一人ひとりとお話するということも大切に、寺という場を身近に感じてもらえるよう努められるようになったと思います。

今の私が学院生活を送ることができるのは、家族や御門徒さん、先生方、同じ生徒の皆さんが居てくださるおかげだと心から感じています。私に側にいてくれる人の大切さを教えてくださった皆さんは私の師です。これから、かけがえのない学生生活を大切に、毎日を当たり前と思わず、日々感謝して学んでいきたいと思っています。

二年生 宮岸 久美代

「遇うだけのことに遇うていかねばならない」「何もかもあたわりや」・・・お念仏の盛んな村に生を受けた私は、明治生まれの年寄りたちから常にそんな言葉を聞かされて育ちました。運命を変えられず、諦めて日々を過ごし何事にも妥協せよという教えのように受け取り、若い頃は素直に聞くことができませんでした。長じて、世間の仕組みの中で、自分が正しいと思いつている道を独りよがりにより自己中心的に歩んできたのです。

還暦を過ぎてからご縁をいただき、真宗学院

の門を叩きました。聴講生として通ううち、それまでの自身の生き方、ものの見方に疑問を持つようになりました。深い見識を持たれた指導の先生方は少しも偉ぶらず、「一緒に学んでいきましよう」と朋として寄り添ってくださり、教室は居心地の良さを感じました。在家の自分が寺族の方々と机を並べることに当初は遠慮のような気持ちがありました。が、学ぼううちその不安も吹き飛んでいきました。仏弟子として生きたい、まことを知りたいと思ひ、昨年本科に入れて頂いたので。

ところがその頃、出産したばかりの長男の嫁が重い病に罹りました。長男宅と病院を往復し、



学院には遅刻気味になる日々。「何故我が家が、何故私が」と何度も思いました。学院の仲間からは常に励まされての一年でした。薬石効なく、嫁は一歳の子を遺してこの春お浄土に還ってしまいました。手を合わせるものの、「あたわり」を引き受けられず心がちぎれ、他の何かのせいにした自己中心的なあさましい我が姿がそこにありました。

「悲しみは乗り越えるのではなく、深めるものである」という学院の講義で習った言葉を繰り返して呟くうち、ようやく、生かされている意味を確かめる日々になりたいと思えるようになりました。引き続き学院で学び、孫と共に手を合わせ、いつでもどこでも自分がいる場所、今のこの場所を『道場』としてお念仏申して生き抜く私でありたいと思っています。

二年生 富樫 駿

結婚した相手が寺の娘だったことが、私と仏教の関わりが始まりです。実家の宗教は沖繩伝統の先祖崇拜、進路はずっと理系で大学は工学部、就職はメーカーの技術職と、これまでの人生で真宗と関わる機会ほとんどありませんでした。そういうわけで、学院での学びというのは、達成すべき数値目標やゴールもなく、何か利益を追求するために物事を考えるものでもなく、自分とは何か、人生とは何かを考えるもので今までやってきた勉強とは全く違うものだなと感じています。

これまでの安定していた人生のルールを外し

真宗学院を卒業して

卒業生 越村 貴美

て、全く違う仏教の道を進むことについて、元のルールに対して全く未練がないわけではなかったのですが、まあこれも何かの縁だろうと思いい仕事を辞め学院への入学を決めました。ただ、そのようなフワリとした決心で仏道を歩むことを決めたので、入学した頃というのは入學理由を家族のため、寺を大切にしてくれてる門徒の皆様のため、という様に自分の外側においていたと思います。しかし、学院での授業や、子育てが本格化するなどのプライベートの変化、そして仕事を辞めたことによって以前よりも自分の過去を振り返り、人生について考える時間が増えたことによって、今はまず自分のために真宗を学びたいと気持ちが変わりはじめました。自分とは何なのか、弥陀の光は本当に私に届いているのか。『真宗聖典』には阿弥陀様はすべての凡夫を救ってくださると書いてあるので、文字通り受け取ればもう救われているはずだけど、それをこの身で実感することは難しい。しかし、それで諦めたり中途半端な答えを出してそこに落ち着くのではなく、ずっと答えを探し続けていくのが大事なのかなと今は思っています。

学院の環境は面白いもので、自分と同じように在家から真宗の道に入った人もいれば、坊主としてずっと寺に関わっている人もいて、年齢も立場も色々です。そういう人たちと一緒に勉強し意見を交わすことができるのも自分の勉強になると感じています。

真宗学院に入学した頃の私は、常に先を読み計算通りに正しく進む方法を求めていると思う。一寸先は闇なのにそのことに気付かずきつと何かがあるはず、という思いは消えなかった。真宗学院に入学したのも、もしかしたら捜し物が見つかるかもしれないという期待もあった。しかし二年生の前期の修練で、『答えなんてないよ』と言われ頭が真っ白になった。それを探しにきたのに、そもそもないものを探していたと知ったときのショックは、これからどう生きれば良いのかと不安に突き落とされたようだった。あまりにも分からなすぎて何度も学院をやめたいと思った。そんなときに毎回の様に学院の仲間が心配して話を聞いてくれた。そんなことが何度も続くとそのことに私は助けられている、支えられていると強く感じた。私が自分でこれからどうしたら良いのかを求めようとしていたけれど、一人でどうにかできるものではないと感じだした。自分が頑張れば何か掴んで生きていけると思っていたことがそうではなかったのだ。三年間学院に学びに来て、仲間との関係が一番私には大きなものとなった。一人では何もできないんだと身をもって感じた。しかしお念仏についてはいつこうに分からなかった。でも私がここで感じた、周りに支えられて私が存在できているという感覚は何か関係があ

ると感じ出していた。答えのないことに真っ白になっている私が支えられて生きられていたからだ。何気なく、言われたからしていたお念仏だったが、気が付いてみるとこの学院は御本尊を中心とした場所であった。だから私が理解していようとしていまいと、そこでの関わりは御本尊を中心とした関係であったのだ。

三年生になると卒業論文を書く時期になる。そのとき私の卒業論文の指導の方から『あなたの立ち位置はどこですか』と聞かれ、外ばかりを見ていた私が初めて自分というものに目を向けることになった。私の立ち位置とは母、妻いろいろあるが、私が立っているのは今居るここではないか、つまり、今ここに私は居たんだと思っ



た。それまで頭の中にいた私がそのとき血の通った生身の私として、現実の存在として現れ出てきた。そしてこれまでの人生でずっと探してきたものは、生き方の正しい回答ではなく私自身であったと初めて感じた。そのことに気付かされたとき私は自分の存在自体がとても嬉しかった。今まではそんなことを感じたことはなく、むしろなぜ生きていけないといけないのか、生きることに何の意味もないのではないかと感じていた。それからは、視界が明るくなったように感じ、月や星の輝き、仲間、夫、子供、いろんな存在はすべて私のためにあったのだと感じるようになった。それぞれが勝手に単独で存在していると思っていたのにすべてが繋がっているように思えた。だからといって悩みや迷いが消えるわけではなく毎日のように襲ってくるのは変わらない。ただ私の立ち位置が、私が今ここに居ることであり、その私が周りの存在すべてに支えられていると感じられるようになったことは、私の中で生きる意味を感じさせてくれるものとなった。

真宗学院という学校に三年間通い、何かできるようにになったのではないか、何かしなくてはいけないのではないかと焦りもあった。そんなとき、同窓会の学年代表になったので、初めて同窓会の集まりに参加してみた。すると会長さんから、初めて来た私に『お念仏って何かわかるか？阿弥陀さんはどこにおるんや...』といろいろ質問攻めをされた。最初は学院に三年通っても何も答えられない自分が恥ずかしいと

思っていたが、だんだん何も分かっていない私私私なんだと、それでいいんだと、だからこれからも聞いていけるんだと嬉しくなってきた。そしてそんな場がここにも私のためにあったんだと思え有り難かった。金沢真宗学院での三年間のご縁は私にとって今すでに生きていたんだと思えた。そしてこれからのご縁は私をどこに連れて行ってくれるのだろうか、どんな気づきを与えてくれるのか、予測のできない世界を歩む勇気を真宗学院は教えてくれたと感じた。

卒業生 藤永 悟

顧みるに、私にとって学院は穏やかな日だまりのような場でした。真宗の教えをこの身にあげて自分を見つめ、問いを投げかけ、良い意味で懊悩しました。それを繰り返した日々は私にとって里程碑であり、得難いものでした。

入学前は闇の中にいたと言えましょう。己の未来像が見えず、自信を持てずにいました。今思えば浅はかですが、知識をつけることで解決を求めました。これは正解ですが最適解ではありませんでした。知識は大切です。ただそれらを物事に結びつける真宗の考え方や感性を優先的に磨くことが大切だと気付きました。そして現代社会で生きる人々が真宗に触れ、自身と向き合うことができれば良いと感じました。

現代は善悪などがはっきりとした二元的考え方を育てる環境です。もちろんこれは良いことです。「人知」による成長は社会で生きるには不可欠です。しかし、答えが明確であるが故に、自分

が正しいと思うことや見えることに執着して自身の毒を見つめることに背を向けようとしている気がします。入学前の私がまさにそうでした。対して、私が出遇った真宗では「分からない」が大いに認められていました。「分からない」が



卒業式 勤行の様子

良いのです。「分からない」からこそ問い続けることができるのですから。そして、真宗の教えを縁として、善悪を包括した自身を、道徳や倫理、常識に依らず見つめて問い続けることに意味があると思います。答えが明確ではないので難しいですが、この継続の過程で積み重なっていくところこそが「仏智」による成長なのだと気付きました。学院内は未来の縮図であり理想でした。

この考えに至る過程で、目標を同じくした学院生とは大いに語り合い、指導の方々には珠玉の言葉たちを頂きました。皆様尊敬すべき善き師で万謝の念に堪えません。金沢真宗学院でしか出遇えなかったかもしれないと考えますと、斯様な縁を与えて下さった阿弥陀様に念仏申し上げたい、そう思わざるを得ないのです。



金沢真宗学院特別講義 開催報告

各分野で活躍されている先生方が、指導や学院生に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧にお話しされます。

講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じます。

ことがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきたい、このような形をもって紹介させていただきます。

2024年度 金沢真宗学院特別講義一覧

No	期 日	講師名	肩書・所属等	講題・内容
1	2024年6月21日(金)	相馬 豊	修練道場長	お寺に身をおいているとは どういうことですか
2	2024年7月17日(水)	坂谷 学称	本廟部堂衆	装束について
3	2024年9月17日(火)	青木 玲	九州大谷短期大学准教授	『教行信証』総序
4	2024年9月30日(月)	楠山 泰道	大明寺(日蓮宗)住職 日本脱カルト協会顧問	破壊カルトとマインドコントロール
5	2024年10月21日(月)	杉田 真衣	東京都立大学准教授	わたしたちの多様性 ―「性」を中心に
6	2024年10月31日(木)	藤場 俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義Ⅰ
7	2024年12月4日(水)	平川 宗信	名古屋大学名誉教授	念仏者として今の時代社会を生きる ―「新しい戦前」をどう生きるか
8	2024年12月13日(金)	藤場 俊基	金沢教区常讃寺住職	『教行信証』講義Ⅱ
9	2025年1月17日(金)	梶原 敬一	姫路第一病院小児科医	浄土の真宗は証道今盛りなり



お寺に身をおいているとは どういうことですか

相馬 豊氏

真宗の教えを学ぶということは何かと言えば、真剣にこの身を生きる私が、すぐわれたいのか、そうではないのかという問いかけから講義は始まった。

近代の真宗学において、一つの大きな流れを作ってきたのが、同朋会運動である。講義では、一九五六年当時の宮谷法含総長の「宗門白書」の言葉より、「仏道を求める真剣さを失い、如来の教法を自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢である」と紹介し、聴講者に仏道を真剣に求めているのかを改めて問いかけた。それは、自他ともにそれぞれから湧きでている、「たすけてください!」という声が聞こえているのかどうかということだ。続けて、「寺に住む門徒なのか」という言葉より、同朋会運動の願いの一つとして、僧侶自身が真宗門徒として立ち上がってほしいということがあるのだとお話しされた。

まずは自分自身が教えを聞き、仏法に教えられる者、それこそが教師の姿勢であり、様々な問題をしっかりと確かめながら、同時にその問題に私をたずねていく。そして、「われもひともし死はなれん」(『歎異抄』)と、人間であることの悲しみ、苦しみを縁(たより)として、はじめに合掌礼拝し尊敬から始まる生活を送る真宗門徒

として他者と出遇っていくことが願われているのだ。決して立派な人間になる学びではないのである。

そのうえで、いま「お寺」とはどんな場になっているだろうか。そこで講師より問われた三つの問いがある。

- ① お寺は一体誰のものか。
- ② お寺は一体何を生み出す場なのか。
- ③ あなたはお寺という建物を受け継ぐのか。それとも教えを受け継ぐのか。

この問いは、いまお寺に誰がいるのかを確かめ、この私が真宗の教えを聞く念仏者として誕生しているのかどうかを暗に問うている。この問いは、本当に耳が痛い。教えを中心とした日常生活を送れているのかどうかをストリートに聞いているからだ。しかし、だからこそ、私たちお寺に住む僧侶の日常生活のすがた(姿勢)こそが、教えの確かさを伝えていく要でもあるのだとお話しされた。わたしは、どこに立ち、どこに軸足を置いているのかが問われている。



装束について

坂谷 学称氏

大谷派の服装構成には八種類あり、それぞれの袈裟や衣など依用方法などを丁寧に話いただき、またその袈裟や衣などの名称の由来などもお伝えいただきました。

まず講師はなぜ装束をきちんと依用しなければいけないのか経典に書かれていると述べられ



特別講義の様子

ました。そして『大経下巻』にある「汝、起ちて更に衣服を整え、合掌恭敬して、無量寿仏を礼したてまつるべし。」「(聖典八十五頁)を引用されました。仏さんの前でお参りするときは衣服を整える心構えが大事であるということを確認いたしました。また五条袈裟などを衣用するときは右肩を出していますがそれは『大経』にある「偏袒右肩」(聖典七頁)の姿であると述べられました。講義を受けて普段依用している袈裟や衣が經典に基づいていることを学ばせていただきました。



『教行信証』総序

青木 玲氏

二〇二三年の金沢教区御遠忌や金沢仏青主催の「聞」で使用されている親鸞図をご存じだろうか。そのデザインは九州大谷短期大学(以下、九短)からお借りしたものだ。この九短は学校全体を我が家のようにして過ごす学生の姿が印象に残る。親鸞の教えを背景に一つの大きな家族のようだった。そこは共に親鸞の教えを聞き、共に伝えていくことを大切にしている温かみを持った、親しみ深い場所のように感じた。その大学で教鞭をとる青木氏。氏は九短での授業の出張講義のような思いで、学院生との時間を共に学んでいきたいとされた。

難思弘誓度難度海大船 無碍光明破無明闇

恵日。

難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

(『真宗聖典』二五九頁)

「難思の弘誓」とはひろく、ひろまる仏さまの願い。どんな人も分け隔てなく、どんな人も決してもらさない仏さまの願いがひろく、ひろまる。今の言葉で言えば「みんな」だと語る。仏さまの願いが「みんな」にひろく、ひろまる。その願いは渡ることが難しい海を渡す大きな船である。と。「難度海を度する大船」しかしここで問題となるのは、「みんな」とは何を指すのだろうかという点である。誰に誓われ、誰が渡り難い海に生きているのか。実は一番抜けているのが、この「わたし」という問題である。

「みんな」の中に「わたし」は入っていますか。

私たちは「わたし」中心でしか生きていけない。どんなに真剣で、どんなに純粋な願いも、わたしの欲からはじまる限り、次から次へと満足することができない。その繰り返しを迷いとされた。外にばかり原因を見ているわたし。どこまでも当てにならないものを追いかけているわたし。

仏教・真宗はそのわたしの中に原因の根っこをみる。そのわたしを知らしめる教えなのである。その「わたし」において、仏さまが誓う「みんな」への願いは、まさに「難思」というしかない。どこまでも当てにならないものを追いかけている「わたし」を発見することの難しさ。

その「わたし」において、仏さまの「みんな」への願いが、他の誰でもない「わたし」に願われたものであったという領きはどこに開かれるのか。それは念仏申す者と成つてはじめて気付かされるものではないかと氏は語る。総序の冒頭の一文から、浄土真宗という仏道そのものが問われてくる「みんな」と「わたし」という課題を改めて知らされる機会となった。



破壊カルトと

マインドコントロール

楠山 泰道氏

二〇二四年九月三〇日に金沢真宗会館ホールで、日本脱カルト協会顧問であり日蓮宗の大明寺(横須賀市)のご住職でもある楠山泰道氏に「破壊カルトとマインドコントロール」という題でご講演いただいた。

楠山氏はまず、破壊カルトがどれだけ社会に悪影響を及ぼし、いかに危険なものなのかという話をお話しされ、続いて宗教と暴力の関係についてもお話しされた。教祖や幹部たちが信者たちを支配するために暴力を用いる場合があり、その暴力を用いたことを正当化するために教義が用いられる場合があるということだった。

次に、オウム真理教を事例にして、優秀な若者たちがどうしてカルト教団に入信して犯罪

に手を染めることになったのか、オウム法廷において、マインドコントロール論が採用されたのかどうかについてお話しされた。残念ながらオウム法廷では、犯罪におけるマインドコントロールの影響についてはせいぜい「情状酌量の余地」程度にしか考慮されなかったのである。日本におけるマインドコントロール論の専門家たちは、裁判にほとんど影響を与えることができなかった。その敗北感からか、その当時からこの三〇年間ほとんど理論的に深化させることはできなかった。

その次にお話しされたのは、カルト教団が用いるマインドコントロールの手法や洗脳とマインドコントロールの違い、さらには勧誘方法についてである。カルトに入信しマインドコントロールにかかってしまうと、そこから抜け出すことは非常に困難である。また、某カルト教団は中・高校生をターゲットに勧誘活動をしているという。だから、世の中にはカルト教団というものが存在することやそこに入信することがいかに危険であるかを、中学生ぐらいから知識として知っておくことがとても大事であることとお話しされた。日本では現在、義務教育の中で宗教についての授業がないため、カルト教団に入信することの危険性を伝えるような授業ができない。そういった状況の中で私は、寺院の教化活動で、たとえば日曜学校や子供会などで、カルトの危険性を伝えられることができればいいのになあ、と思った。

最後に、カルトから脱会した人たちの社会復帰についてお話しされた。カルト教団から脱会さえできればそれでいいという訳ではない。脱会しても深刻な後遺症があり、立ち直ることが容易ではない場合がある。脱会した人が社会に復帰するまで支援していく必要があるということとを教えられた。



わたしたちの多様性

―「性」を中心に

杉田 真衣氏

杉田先生をお招きするのは二回目となります。先生の研究活動は、フィールドワークを通して出会われた性的少数者、ホームレス、自身の努力からでは抜け出したい貧困状態にある方などの、いわゆるマイノリティと呼ばれる人々へ寄り添おうとする姿勢を強く受けとることができます。

今回の特別講義では、近年耳にする機会の多くなったダイバーシティ(多様性)という概念が日本でどのように受け止められているか伺う機会をいただきました。

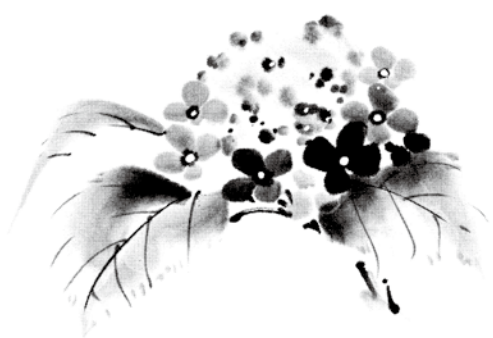
多様性を認めることは、誰もが生きやすい社会をつくるために必要な流れですが、企業内では「他者の尊重を謳いながら企業の競争力を高めて収益をもたらす生産性や効率性を重視しており、人権保障という視点は欠けている」(当日

資料より引用)状況にあることを知りました。

働いているのであれば、生産性や効率性を求めるのは当然のことのように思われますが、言い換えれば人間を評価対象としてのみ見ていくということでしょう。このようにダイバーシティという大切な概念すら、人間の都合のよいように理解され、また浸透している状況に危機を感じました。

講義の最後に「多様性を大切にすることは、すべての人たちが、いいことにされず、一人ぼっちにならず、ここにいってもいいと感じられる場をつくることではないか」と宿題をいただきました。

大変シンプルですが、それでいて大変難しい宿題です。生きていくうちに、どれだけこの宿題を提出することができるだろうか。一人ではなく、どれだけの人と一緒に提出できるだろうか。





『教行信証』講義Ⅰ・Ⅱ

藤場 俊基氏

昨年度に引き続き、藤場先生をお招きし『教行信証』の講義を2回開催した。講義では『真宗聖典』を引かれながら、その内容を丁寧な解説された。そして、講義を通し、仏教に学ぶ姿勢の在り方そのものを教えていただいたように感じた。特に、「解脱」に関して、「煩惱」を消すのではなく、身を煩わすものが有りながらも、それに煩わされない身となることと押さえ、釈尊が解脱したことの意味を改めて学ばせていただいた。そして、その釈尊の在り方に自身も成りたいと、共鳴した人々の歩みが仏教に学ぶものであるとの言葉が印象的だった。また、釈尊のようになりたい、釈尊のようにありたい、それを「成仏」と直接言わずに、念仏をして浄土に往生するという「往生」と一呼吸置いた表現にこそ真宗の特徴があるとのことであった。

私も仏教の歴史の中に身を置くものとして、またその中でも「真宗」にご縁をいただいたものとして、今後の課題と指針を深める大切な講義であった。

あらためて、今後も「教行信証」を自らの現実との関わりという観点から幾度も読み直していきたい。

念仏者として
今の時代社会を生きる
―「新しい戦前」を
どう生きるか

平川 宗信氏

法学者の平川宗信氏に『念仏者として今の時代社会を生きる―「新しい戦前」をどう生きるか―』という講義のもと、本願に生きる念仏者の生き方についてお話いただいた。

若いころから人生の虚しさや寂しさに苦悩してきた平川氏は、生涯の師である和田稠先生との出会いによってその後の生き方が大きく変わったという。和田先生から教えられたことは、「仏法を学ぶということは理解することではなく、人生の方向を決定すること」であった。「教えを理解すること」と「教えに生きる身となること」の間には大きな断絶がある。現代人は何でも頭で理解しようとするが、人間は身が存在である。念仏の教えをこの身に受け「本願に生きる」者となること、それが和田先生からの教えであった。

本願とは、いのちの根源的要求、すべてのいのちと共に生きたいという願いであるという。したがって本願に生きるということは、具体的には「無三悪趣の願」にある、地獄(戦争)・餓鬼(飢餓)・畜生(隷従・差別)の無い世界、そしてその願いの成就した「国富民安・兵戈無用」の世界

界を求めていく歩みである。

私を生きるとは時代社会を生きることであり、この世界の深刻な社会問題・政治問題は私から離れたところにあるのではない。グローバル化した今の時代にあつては、私たちは世界の様々な課題とつながり、社会から影響を受け、また社会に影響を与える一人として存在している。だから共に生きることを願う本願の教えに生きることは、おのずと社会性・国家性ともなってくるのである。

現在私たちを取り巻く環境は本願に背く状況に溢れている。ウクライナやガザの戦渦は治まる気配がなく、また米中の対立構造の中、アジアの軍事的緊張も高まっている。念仏者として「新しい戦前」と言われるこの時代をどう生きるのか。軍事力という鬼神を頼むのか、それとも本願を恃むのか。平川氏からそのような問いかけをいただいた。





浄土の真宗は 証道今盛りなり

梶原 敬一氏

小児科医であり、真宗大谷派僧侶でもある梶原敬一先生に「浄土の真宗は証道今盛りなり」という講題でお話しいただいた。

はじめに、子どもの苦しみや問いは「人間とは何か」というところから生じており、大人はそれをごまかして生活している。しかし、私が私として生きていく理由、意味がわからなければ、死んでいくことも大変なことである。真宗の教えとは、生きる意味を教えることであるとはっきり示された。

お話のなかでは、たくさんの問いかけがなされた。声明を通して何を伝えたいのか？そのことを意識しながらお勤めしているのか？念仏が聞こえない声明は誰にも届かない、という指摘は耳の痛いものであった。それは、人間が念仏に救われてきた歴史が自分にも届いているのかという問いかけでもあった。

念仏は個人的な苦を救うのではなく、苦を抱えた人間を救う。人間が生きる世界を救う。時代を救う。「今」という時に念仏の教えを受けとめていくことは、過去をも受けとめ生きること。そして「人間」として育てられていく世界としての「浄土」を、静かな語りで教えていただいた。

卒業後の歩み

金沢真宗学院を卒業されてからの開法生活について、寄稿いただきました。

「同窓会の歩みの中で」

小山 健

私が真宗学院を卒業してから、もう三十年近くになります。今日ではもう古株なのですが、よく顔を合わせる役員の方々は、何故か自分より年上の方ばかりでなにより人生の先輩としていつも刺激をいただいています。そして、同窓会において影響を受けた方として会長の存在は欠かせないものでした。

私が同窓会の幹事役員会に参加した当初の会長は森田喜一さんで、温厚かつ真摯な方だったと思います。当時の講演会などは社会的な関心が強かった印象でした。

新興宗教団体の進出について危機感を抱かれていたことが思い出されます。今日、宗教二世問題を聴くと、自分が当時から無関心であったことを思われます。

次に会長になられた中村和雄さんは、私たちを引っ張ってくださった存在でした。

今も続けられている本山奉仕団参加や、学院卒業式とパーティーへの参加は、同窓会員の繋がりを大切にされている姿勢からだったと思う

れます。特に奉仕団での出会いによって北海道の別院等に研修旅行に行くことが出来たのは、中村さんの行動力のお陰だったと思います。

会報誌「さんが」にも中村さんに多く出筆していただき、篤信の姿がうかがえました。しかし、戦争経験による投稿もあり、当時「こんな戦時中の話ばかりで、読む人はどう思うのかな」と、自分も編集者として思っていたことがありました。

しかし、今、世界で起きている紛争を見ていると、中村さんがこのことを教え伝えなければいけないという思いであったということに気づき、恥ずかしくも思えてきます。

現会長の荒木範夫さんは、人との関わりが希薄になっていく中、またコロナ禍もあって、関わっていくことの大切さ、もとより関わっている存在として目を開いていくことを教えられます。顔の広い荒木さんによって、いろんな所へ連れて行っていただいています。

会長だけでなく役員や同窓会員の方々の力添えもあって、自分も引っ張られ、学ばされてきたことが、同窓会の歩みであったと思います。ひとえに人力、しかしながら、その時代を生きても問われてきたからこそ生まれた力であるように思われます。

振り返ってみれば、課題に気づき課題を共にする場に同窓会があり続けることが望まれていると感じています。

移動研修会&一泊研修会

実施報告

金沢真宗学院では毎年テーマを設定し、三学年合同で二つの研修会を行っています。一つは秋の移動研修会、近畿・東海圏へ赴き、旧跡を巡るなどのフィールドワークを中心とした内容です。もう一つは冬の「一泊研修会、金沢別院・教務所を会場に学年混合座談を行い一年間の学びを深めます。

また、この課外授業は単に知見を深めることを目的とするものではありません。

私たちがいただいている教えは果たして、本当に親鸞聖人が見出された「浄土真宗」なのか、都合よく解釈し、伝えてはいないか。そのような問いをもとに、「〇〇を学ぶ」ではなく「〇〇に学ぶ」、自らが念仏の教えと向き合う姿勢を顧みるといふ確かめを大切にしています。

そのため、テーマは真宗学・仏教学を中心としつつも広く非戦平和や差別問題などの社会問題も含め、三年間異なるものが設定されます。

二〇二四年度の実施は下記の通りです。



移動研修会

テーマ 「私たち日本人の戦争と差別」

―「在日」の人々を通して―

行 先 「京都朝鮮中高級学校・ウトロ平和祈念館」

期 間 二〇二五年一月十一日(土)～十二日(日)

本年は学院生・指導総計二六名の参加を得て、京都府へ赴いた。本来の九月の予定から台風による延期を経ての実施となった。

また、本年は特に在日朝鮮人への差別をなぜ学院がテーマに設定するのか、という点をあらためて学院生に伝えるため、事前に在日朝鮮人差別を扱った映画「かば」の上映会を行い、川本貴弘監督によるお話、学院長講義を行った。

初日はまず、京都朝鮮中高級学校へ伺い、教職員の方から、来歴や学校を取り巻く課題など現状をお話いただいた。クラブ活動など学生の様子も見学させていただいた。

二日目はウトロ地区、平和記念館に赴き、講和・フィールドワークを行った。ウトロ地区は戦前、京都飛行場とそれに併設する飛行機工場の建設に従事した朝鮮半島出身の方々とその家族が多く住まれた地であり、戦後、苛烈な在日朝鮮人差別の被害を受けてきた地でもある。

事前講義や研修会を通して、あらためて太平洋戦争、それに関わる教団の動き、そして在日朝鮮人差別の歴史・実情を学ぶことで、各々が大谷派教師資格取得を目指すにあたってのこの問題の受け止めを考える大切な機会となった。

一泊研修会

テーマ 「今いのちがあなたを生きている」

―悲しみをご縁として出遇う世界―

講 師 ジェシー 釈萌海氏

期 間 二〇二五年二月一五日(土)～一六日(日)

母親の安楽死による心の落ち込みから、「いのち是谁のものか」の問いをいただき、御遠忌テーマである「今いのちがあなたを生きている」に出遇ったジェシー氏。

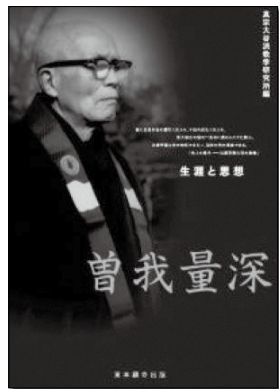
亡くなった人からどんな願いをかけられているのか。そしてかけがえない人の死は「私たちがこれから生きていくことに対してどういう意味があるのか」と、講師と共に教えに問いかける時間としたい、という願いのもと設定されたテーマにより講義をいただいた。

講義のあとは学年混合座談を行い、四班に分かれ、指導をファシリテーターとしながら、学院生が積極的に発言をした。初日の日程終了後は講師を囲んでの懇親会を行った。短い期間ながらも先輩・後輩が一つのテーマについて語り合い、寝食を共にするこの一泊研修会は大切な学びの場であるとあらためて指導も含めた参加者が再確認する機会となった。

本の紹介

①『曾我量深 生涯と思想』

真宗大谷派教学研究・編
A5判・二八〇頁／一、九八〇円(税込)



親鸞の教えを
独創的に考究し、
教団内はもとよ
り、西田幾多郎
などの思想家に
も影響を与えた
近代真宗教学の
巨人・曾我量深(一八七五～一九七二)。
その生涯と思想を尋ねる一冊。

② 煩惱百八面相

梶 哲也・著
今村風子・絵
文庫判・一二〇頁／七七〇円(税込)



言葉としては
よく知られてい
るが、具体的な
中身はあまり確
認されない仏教
語「煩惱」。
仏教学の研究
者である著者が、仏教の「煩惱とは何か」を經典・
注釈書にもとづき解説。
苦悩の原因をより鮮明に知るためのガイド。

③ 生も死も引き受けて

―南無阿弥陀仏のいのちに生きる―

著者・延塚知道氏
新書判・八〇頁／三三〇円(税込)



著者の父
や師、郷里の
念仏者との
出会い、そし
て妻の看病
と別れの中
で交わされ
た言葉をとおして、教えに生き、死を受け入れ
ていくとはどういうことかを尋ねる。

編集後記

「震動」第三十三号をお届けいたします。編集にあたりこの一年を振り返って見ますと、京都への移動研修やジェシー・釋萌海氏を講師にお招きした一泊研修、九回にわたって開催された特別講義など、実に多くの貴重な学びの機会をいただくことができました。また昨年度も多くの学院生がご卒業され、教師としての第一歩を歩み始めることとなりました。卒業された皆様方、真摯に且つ謙虚に学ぶ姿勢は三年間を通して変わらず、その姿にこ

ちらも背筋を正される思いでありました。かつて「これまで学院でいろんなことを学んできました。しかし私は聞いてもすぐ忘れてしまう策のようなものです。だからこれからも仏法に身を浸していく生活をおくっていきたいと思います」、そんな言葉を残して真宗学院を卒業していかれた方がいました。学院の三年間は長いようですが、過ぎてしまえばあっという間の三年間です。その限られた期間の中で、仏法を聴聞し続けていく生活を得たのであるならば、これに勝る利益はないかと思えます。新たな日常がスタートした卒業生

の皆様におかれましても、これまでと変わらぬ姿勢でみ教えにこの身を照らしていく生活を続けていただき、また今後も法友として歩みを共にしていただければと思います。

平野 慶之

